

厚生科学研究費補助金（エイズ対策研究事業）

分担研究報告書

エイズに関する普及啓発における非政府組織（NGO）の活用に関する研究

その3

諸外国における AIDS-NGO の活用状況に関する調査研究

(1)

ロンドンにおける AIDS-NGO（非政府組織）の活動の実情

主任研究者	五島真理為 HIV と人権・情報センター理事長
分担研究者	新庄文明 長崎大学教授 クリスティン・ピルカヴェージ HIV と人権・情報センター国際部部長
	木下ゆり 同上名古屋支部事務局長
	池上正仁 同上大阪支部事務局長
	塩入 康 東北 HIV コミュニケーションズ事務局長
協力研究者	大坂英二 WITH 伊藤葉子 中部学院大学講師 吉原則子 HIV かごしま情報局 米子香苗 HIV と人権・情報センター四国支部 高橋礼子 同上東京支部 伊藤麻里子 同上名古屋支部 ケイトリン・ストロネル 同上東京支部 西山 毅 長崎大学助手 堺本哲司 岡山理科大学大学院生

研究要旨：

わが国における NGO と公的機関のネットワークを強化し、効率的な NGO の活用の促進に資することを目的として、英国の AIDS-NGO の他団体との協力関係について調査した結果、以下のことが明らかとなった。行政の AIDS 対策は、必要などころに必要な対策を徹底的に行うという方針のもと行われており、英国の AIDS-NGO が行政からも国民からも社会資源として認知されている。AIDS-NGO の活動は行政からの委託・助成事業がその中心を占めており、HIV/AIDS をめぐる医療や社会状況の変化に柔軟に対応しつつ、多様なニーズに応えるべく、努力と工夫を重ねている。これらの活動の背景には高い人権意識のもとに感染者・患者を支援する行政と NGO の連携があり、AIDS と共生する社会がシステムとして構築されている。

A. 研究目的

英国では1982年に初めてAIDS患者が報告されたが、政府が莫大な費用を投じて感染予防対策に取り組み、感染爆発を阻止し得た数少ない国の一つとされている。これは、早い時期から社会啓発を重視した政府の援助と非政府組織（NGO）の積極的な取り組みが行われた成果であるとされている。もとよりアメリカやヨーロッパにおいては、NGOが重要な社会資源として認められており、AIDS啓発やケアサポートにおいても、優れた研究や実績が示されている。なかでも、世界のAIDS-NGOのモデルとなっているテレンス・ヒギンズ協会ならびにライトハウス、ランドマーク等が活動している英国は、地理的にも社会環境、教育、文化レベルが日本と似ているばかりでなく、日本の近代化のモデルとなった国であり、その英国の優れたAIDS-NGOや医療機関を訪問し、活動の理念と実際や行政との連携のあり方について体験し学び、今後の活動に資する。

本調査は英国のAIDS-NGOの他団体（政府機関、他のAIDS-NGO）との協力関係を中心に、英国のNGO活用の現状を明らかにすることにより、わが国におけるNGOとGO（公的機関）のネットワークを強化し、効率的な資金提供を含むNGOの活用の促進に資することを目的として実施した。

B. 研究方法

ロンドン市内のNGOを含むエイズ関連機関を研究者が訪問し、専門職スタッフや利用者の聞き取り調査を行った。また、実際の活動にも参加し、各種資料の収集等も行った。調査内容は、英国のAIDS対策の現状と当該機関の活動の現況について、平成

12年度厚生科学研究「エイズに関する普及啓発における非政府組織（NGO）の活用に関する研究」において実施した日本のNGOの活動の現状に関する調査に対応する内容が把握でき、それにより英国と日本のNGOを比較できるように考慮された。調査は、主任及び分担研究者の数次にわたる渡英を含む現地訪問調査として実施した。

C. 研究結果

1. 英国のAIDS対策の現状

英国では1917年の性病予防法によって性感染症に対する無料・匿名の診療・検査が保障され、さらに1971年には、地方保健局ごとに性保健科を設置することを規定した障害者法が定められているので、英国のAIDS対策はこの性感染症対策の延長上に進められている。HIV抗体検査受検率が高く、感染者全体の7割が自らの感染を自覚しているといわれている。AIDSに関する重点的な対策を要する地域の保健局には、国から直接に別枠の予算が割り当てられ、最重要課題として取り組まれてきた。また、1990年に成立した「NHSと地域ケア法」によって、HIV感染者へのコミュニティケアが精力的に進められている。英国のHIV感染症の歴史は、3つに大別することができる。

第一期（1984年～1991年）はAZT単剤療法の時代であり、効果的な治療法がなく、医療・看護ケアの専門家が生まれ、在宅診療チームが発達して行ったが、看取ることが中心となっていた。ロンドンの各地にもエイズ・ホスピスが普及していった。

第二期（1991年～1995年）は2剤併用の時代であり、日和見感染症や腫瘍のコントロールも向上し、死亡率もある程度減少した。HIV/AIDSの専門家ではなく臨床地域

看護専門職（コーディネーター・ナース）や地域の家庭医、栄養士などさまざまな職種による在宅診療支援や緩和ケアへのサポートが高まった。

第三期（1995年～現在）はHAART療法の時代であり、死亡率やAIDS発症率が減少し、入院治療から外来ケア中心へと変化していった。23種類の抗HIV薬が認可され、副作用やアドヒアランスの問題・多剤耐性の問題・薬剤費の増額など新たな問題が生じてきた。HIV関連予算のかなり（キングズカレッジでは5分の2）が薬剤費となり、予防やケアに新たな課題も生じている。また、副作用や多剤耐性ウィルスなど「治療の失敗」による死亡例が多くなってきたことも指摘されている。

これからは長期慢性疾患としてコントロールが今後の課題となり、薬剤の副作用による健康状態の悪化や死亡例、C型肝炎の重複感染と肝移植、薬剤耐性ウィルス（新たな感染者の20%がすでに薬剤耐性獲得）に対応して長期にわたる管理、治療の簡略化・中断（ドラッグホリデー）などが診療現場では課題となっている。ロンドンでは新規発生の主となる移住民やオーバーステイの感染者の治療中断例への対処も課題となっている。

2 エイズ対策を担う専門職種

ロンドンにおけるエイズ対策を現場で支えているのは、それぞれの専門職の自立と協働であり、患者・感染者を中心としたチーム医療が、システムとして確立されている。NGO活動とも深い連携をもつ、これらの専門職のうち、わが国においては一般的な活動がみられない2-3の専門職種とその役割について記す。

（1）ヘルスアドバイザー（療養全般のカウンセラー）

ウンセラー）

英国のHIV感染者・AIDS患者の大半が在住しているロンドンにおいて、検査・診療から生活支援にいたるまで感染者、患者に対する支援は、ヘルスアドバイザー・NGOのスタッフやボランティア・家庭医・性感染症専門医・その他の各科専門医・看護スタッフ・栄養士・ソーシャルワーカーなど、患者・感染者とそのパートナーを取り巻くチームケアの体制が整備され、その中で実施されている。英国とわが国の差異は、これらの多職種間の連携の実情と、その連携の鍵となるヘルスアドバイザーの役割である。

ヘルスアドバイザーは受診者のケアマネジャーあるいはケアコーディネーターともいべき存在であり、HIV抗体検査前カウンセリングはもちろん、検査後の説明や感染告知も行う。またあらかじめ、HIVポジティブであった場合に告知すべきパートナーがいるのかも確認した上でヘルスアドバイザーから直接にパートナーへの告知も行われる。その際、誰に関する情報かは告げられない。ヘルスアドバイザーは、感染者への心理的援助だけでなく、あらたな感染の予防や感染者の早期発見につながる重要な役割をも果たしている。

（2）コミュニティ・ナース（地域看護の専門家）

コミュニティ・ナースは、終末期ケア・在宅看護・HIVの3つの領域を修めた専門家である。ロンドン市内の3地区（ランベス、サザーク、ルイシャム）を6人の看護婦が担当している。ナショナル・ヘルス・サービスにより、HIVについての医療サービスはすべて無料で提供されプライバシーも守られる。その主な役割は以下のとおりである。

① 患者、地域、専門職を対象とする教

育

一人の患者の医療には、看護婦・ソーシャルワーカー・医師等数種の専門職が共同で関わっているが、コミュニティ・ナースはエイズに関する専門的な立場から、それらの職種に対する教育とチームワークを重視している。各地の専門外来との情報交換も行い、小児科や婦人科クリニックとの連携も重視している。専門的な治療はHIVセンターで行うが、すべての人々は必ず家庭医（GP）に登録されているので、GPとの連携も密に行っている。また、GPに対する情報提供や指導も重要な仕事である。

② ニーズの評価とサービスの決定
従来は、いかに早くニーズを把握し的確なサービスを提供するかが重要な仕事であったが、HIV/AIDSに関する事業予算の削減の中で、利用できるサービスが制限されてきている中で、コミュニティ・ナースには心理的・社会的・身体的ニーズを評価してサービスを選ぶことも仕事となった。また、すべてを公的機関で提供するのではなく、積極的にAIDS-NGOのサービスも活用するよう勧めている。

コミュニティ・ナースはヘルスアドバイザーとともに、NGOと感染者をつなぐ窓口でもある。ロンドン南岸地域には専門外来が3ヶ所（キングスカレッジ、セントトーマス、セントジョージ）あるが、どこに住んでいても最適な治療が受けられるように連携し、お互いに情報交換を行いつつ、どこでどんな治療を受けるか、24時間どの時間帯でも必要なサービスが受けられるよう患者や家族を指導している。

③ サービスの内容
コミュニティ・ナースの主な業務は以下のとおりである。小児科領域に関しては、小児専門の訪問看護婦も訪問できるよう取り計らっている。

◇ 在宅療法（吸入薬や静脈注射など）、健康管理用具の紹介、熟練した家庭看護法の紹介

◇ 福祉の権利、給付金や慈善基金の紹介

◇ 社会サービス…住宅改造・配食サービス・ホームケアサービス（洗濯・買い物など）など、何をどれだけ受けられるかを直接調整する。

◇ 短期入所サービス（レスパイト・ケア）：施設利用のコーディネート

◇ 退院計画や職場復帰に関する助言、精神保健、家族計画、妊娠・出産、セクシャルヘルス、痛みと症状のコントロール、栄養など

（3）栄養士

栄養と免疫との関係が明らかにされたことや、抗HIV薬の副作用による代謝異常が問題になってきたことにより、栄養士に期待されることも変化した。基本的には、外来患者にマンツーマンで指導をしている。入院から外来へと栄養面での支援をつなぐことも重要な仕事である。また、NGOや地域へ出向いて行って周産期・育児期の女性たちにグループ指導をしている。HIV感染者の療養支援における栄養士のおもな業務は以下のとおりである。

① 栄養状態の評価：腕の長さや腕周りから体脂肪の簡単な評価をしたり、身長・体重・コレステロールや家族歴・成人病歴等の問診をしたりして、栄養状態を評価する。その上で、HIVと栄養についての基本・食事が体を作ること・免疫にはどのような栄養素がかかわるかなどについて伝え、個々に合わせた栄養指導を行う。アルコールと砂糖の摂取量に必要な注意を促し、民間施設を利用した運動療法も勧めている。

② 栄養食品の提供： 栄養食品も、薬

剤の一部として無料で支給される。退院後もしばらくは栄養食品を届けており、地域のスーパーからの配達についてコーディネートしている。

③ 文化的背景を重視した指導： アフリカ圏の感染者・患者が多いため、その食習慣や食生活を尊重するよう配慮しながら指導している。特に、母子感染予防のために必要な母乳から人工乳への導入については、ワークショップを開き、母親教室のようにグループに対する指導をしている。また、ミルクを買えない場合は、無料で支給している。

3. ロンドンのAIDS-NGO

英国では、NGOが行政からも市民からも社会資源として認知され活用されている。このことはNGOが常に外部からの評価にさらされているということでもあり、その緊張感が活動の充実につながっているのであろう。自分たちの使命を明確に自覚し、ここ数年大きく変化してきたHIVをめぐる状況に的確に対応している。

1) テレンス・ヒギンズ協会

(1) 背景と理念

Terence Higgin's Trust は1982年に設立され、THT はイギリスの最も大きいAIDS NGO として知られている。THT のMissionStatement は、「HIVの感染広がりを予防し、より良いSexualHealthを推進すること。HIV/AIDSの影響を受けている人の健康とquality of lifeを向上するサービスを提供すること。HIV/AIDSの個人的・社会的・医学的インパクトが一般の人々にもっと理解されるように啓発活動を行う」と記されている。

(2) 沿革

1983年に、AIDSで亡くなったテレンス・ヒギンズ氏の友人4人によって、彼の名を残し、感染者や患者を支援するために設立された。当時はほとんど情報がなく、恐怖と不安ばかりのなか電話相談から始められた。現在、ロンドン市内に4ヶ所それ以外に8ヶ所の支部をもっている。2000年10月1日には、2番目に大きいLighthouseと合併し、現在はヨーロッパの最も大規模のAIDS NGO になっている。200人の専従スタッフ、1000人の会員費を払う会員、600人以上のボランティア、超大規模のNGO になっている。

英国のどこにいても同様のサービスが受けられるように取り組んでいる。

(3) 資金

THTの運営のための年間予算は約20億円で、その半分は国と地方自治体から提供される。あとの半分は統合されたNGOの資金調達で、企業からの定期的な資金援助と比較的裕福な住宅地やデパートの街頭募金などを含む個人の寄付で、約10億円の寄付を集めている。資金調達・情報管理・人材確保・など多くの部門が運営を担当している。

2000年度の収入は11,129,000ポンドで、そのうちの5,119,000ポンド(約50%)は行政からの委託金や助成金であり、寄付とファンディングが合計で2,909,000ポンドに達成した。Lighthouseと合併したための収入も2,945,000ポンドだったので2000年はこの意味で稀であった。普段は収入の60-79%はGOから獲得し、委託金は最も多い収入源となっている。

THTはとても大きい、有名なチャリティーなので、有名なパトロンもたくさんいる。企業スポンサーは製薬会社・テレビ局・デパート・銀行を含む26社とチャリティー

基金31ヶ所が2000/2001年次報告書に記録されている。

(4) 活動内容

主な活動計画は以下のとおりである。

① 教育/啓発

i) 社会の状況に合わせて、さまざまな教育/啓発プログラムを行っている。イギリスではアフリカ人コミュニティーの中に感染が急激に増え、それに対して、同コミュニティー内 HIV 予防についてのシンポジウムを開催し、さまざまな出版物を出している。また、同コミュニティー内の HIV 差別と戦うキャンペーンを行った。

ii) THT は CHAPS という 11 ゲイ団体が入っているパートナーシップのリーダーとしてゲイをターゲットにする全国的キャンペーンを年 2 回行う。一対一のアウトリーチや Exposed! という出版物をただでゲイ・バーなどで配るという活動もしている。

iii) 地域のの必要性に従い、sex worker や youth のプログラムも行う。

② PWA/H とそのパートナーや親類へのサービス

i) カウンセリング：全国の電話相談 (Helpline)、ロンドン近辺に住む PWH/A のための電話相談 (週 4-5 時間) また Special Advice Centre は弁護士などの専門家は PWH/A を対象にアドバイスをする。また、ターゲット・グループ・カウンセリング (黒人、若者など) も提供している。

ii) さまざまなセラピーを提供している。

iii) Positive Futures といっしょに PWA の職業トレーニング・プログラムに参加する。THT はアメリカのスタンフォード大学で開発された「Living Well Approach」のチームを設立し、PWA/H の自信を高める活動を行う。チームメンバーは全員 PWH/A。

③ アドボカシー

i) さまざまな政策作りに参加する。イギリスの「National Sexual Health and HIV Strategy」にも貢献し、またヨーロッパ議会にも衛生法案などについてロビー活動をしている。

ii) PWH/A に「仕事をくれ！」キャンペーンを行うと共に、イギリスの議会内の担当委員会に PWH/A に対する差別を訴えた。

(5) 特色ある活動

① 電話相談

1 名の専従と 80 人のボランティアにより、365 日運営されている。毎日 10 時間 (10 時~20 時) を 5 時間ずつの 2 交代で、2 回線開設している。電話相談は、個々人の持つ悩みや問題について即対応することができ、重要な活動であると考えている。情報提供や不安の受け止め、セーフターセックスについての話し合いなどを行っている。ポジティブのボランティアもいる。

② 直接支援

カウンセリングやバディ活動。バディは、話し相手になったり家事の手伝いをしたりする。特定の技能を持ったボランティアが、その職種 (例えば庭師、電気技師、インテリアデザイナー等) を生かした支援をすることもある。

③ 住宅に関するサービス

以前は、感染者であることが家主に知られたために住居を追い出された人に、適切な住宅を見つけるのが仕事であった。最近では、感染や発症によって仕事を辞めて収入が減った人に収入に見合った住居を探すなど、住居対策は重要な事業である。

④ 福祉制度に関するサービス

英国の福祉制度は複雑で一般の人にはわかりにくい。専門家が、どんなサービスを使うことができるかを指導する。

⑤ 法律相談

不法入国も含め、海外から来た人が英国に

住んでいく権利を保障する。

⑥ 借金に関するサービス

数年前までは「AIDS=死」と思われていたため、感染者の中には預金以上のお金を使うこともあったようだ。HAART 療法によって長く生きられるようになり、その結果、借金を抱えるという問題がおきている。それぞれの収入や能力に応じた返済方法を指導する。

⑦ 療養上の支援

治療についての相談を行う専門チームがあり、PWAによる電話相談（ピア・カウンセリング）が行われている。特に服薬に関する支援を行っており、医師とではなく、感染者の立場から先輩として相談に応じ、十分な話し合いをしている。

⑧ 対象者別の予防啓発活動

一般市民・感染者・ゲイ・アフリカの人たちなど対象別に、また人権問題等の課題別に予防啓発に取り組んでいる。マスコミへの働きかけや、パンフレット・リーフレットの作成、会議・学習会の開催・研究事業等を行っている。感染者にとっては、再感染をしないことと他人に感染させないことのために、予防教育が大切である。また、自分が感染者であることをできるだけ身近な人に伝えることができるような雰囲気を作っていくことも大切であると考えている。医師に対する教育も重要である。自分は何でも知っていると思いついでいる場合があるので、特にセーファーセックスについてなど、何が重要で何が必要かを伝える教育を行っている。

(6) 教訓

他国と同じようにイギリスでは HIV/AIDS の一般感心は下がっている。THT の 2000/2001 年次報告書にも書いてあるようにイギリス人の 86% は時間もお金も AIDS 団体に挙げないと 2000 年

のアンケートに答えた。その状況の中、行政も以前の金額を出しにくい状況であろう。その状況を読んで、THT は他の AIDS NGO 「Lighthouse」と合併し、お金が厳しい状況であるにもかかわらず、提供するサービスを拡大している。このように効率性と高い質のサービスを目標にしている NGO は、ある意味企業化しているとも言/ イギリスの行政も NGO の扱いはとてもビジネス的な面もあり、あるサービスを民間に公募し、最も適当な、低コストでできる団体を選択していく。それはときには THT のような NGO である。お互いに認め合う関係がここで保証される。

THT が上手に社会のニーズを読んで最も必要とされているサービスを提供するように努力している様子が見られる。巨大な団体でありながら、フレキシブルであるということも重要であろう。中央化されていなく、地域の組織を生かし、その場その場の人々のニーズを把握して、それに合ったプログラムを立ち上げる。これも THT の力になっている。

金銭的に厳しい状況の中に Terrence Higgins Trust はビジネス的なアプローチを選び、サービスを拡大してきている。行政も NGO をビジネス的な扱いをし、お互いに利点が多く、低コストで、優れたサービスを最もニーズがある人々に提供している。この状態を生んだのは行政の制度も重要な要素であるし、NGO の THT も徹底的にニーズを把握する能力と、サービスをそれに合わせる、変えていく柔軟性も重要であろう。

2) ロンドン・ライト・ハウス

(1) 沿革

London Light House は 1986 年、ゲイのグループや保健局（行政）・一般からの寄付によって、二人の男性が設立した。建物は

ユダヤ人小学校として使われていたもので、行政から提供されている。「ライトハウス」は、灯台の意味で、HIV/AIDS と共に人生という海を航海するうえで光となるように名づけられた。感染者や患者だけでなく誰もが立ち寄ることができ、そこで人間的交流ができるようなレストランや患者・感染者のためのセラピールームなどがあり、デイセンターとして機能している。

また、末期の AIDS 患者のためのホスピスも備えていたが、ここ数年で HIV/AIDS をとりまく状況が大きく変化したため、2 年前に閉鎖された。現在は、感染者が社会へ戻っていくための支援、つまり職業訓練や種々のセラピーを行う場として機能している。

設立当初は厳しい差別の時代であり、スタッフの持っていったお金に銀行員が触らないということもあった。1990 年、ダイアナ妃が訪れた時には世界中に報道され、人々の AIDS に対するイメージを変えるきっかけとなった。ダイアナ妃は亡くなる 2 週間前まで頻繁に訪れ、患者たちと親しく会話を交わしていたといわれている。

エイズをとりまく現状の変化とともに活動の内容も変化する。かつてホール一面に飾られていたメモリアルキルトは現在は取り外され、亡くなった人のための祭壇を設けていた部屋は、今では会議室として使用されたり、瞑想の部屋として使用されている。あくまで現実に即した対応をしているライトハウスであるが、その理念は一貫して「HIV 感染者 AIDS 患者が、自分の人生を自分で設計できるように身体的にも心理的にも社会的にもサポートし励ますこと。病気や障害によって世界を狭めてしまうのではなく、未来に向かって可能性をひろげ、社会参加を促し、最期まで自立したポジティブな人生を送れるようにサポートすること。」である。建物のあちこちの壁や掲示板

に「future (未来)」という文字が躍っているのが印象的である。

(2) 現状

2000 年にはイギリスの最も大きい AIDS NGO である Terrence Higgins Trust (THT) と合併した。その後はほとんど THT の中に入り、個別な団体として存在が多少薄くなった。しかし、Lighthouse の特色はあったからこそ THT が合併を求めて面もあり、それは Lighthouse の総合的な社会的ケアであると THT の 2000/2001 年次報告書に明らかにしている。Lighthouse では 24 人の専従スタッフと 1600 人のボランティアがいる。

(3) 活動の内容

主な活動内容は以下のとおりである。

① 教育/啓発

学校などで開催されるセミナーなどのためのファシリテーターを派遣する。また、さまざまなイベントなどを企画し、情報チラシなどを作成する。

② WA/H とそのパートナーや家族へのサービス

- i) カウンセリング：一般、福祉手続き、栄養など、さまざまな課題について
- ii) セラピー：マッサージ、針、リフレクスオロジーなど、PWH/A にはさまざまなセラピーを提供している。
- iii) HIV/AIDS に影響を受けている子どものための Brian Shaw Children's Centre を運営している。

③ アドボカシー

研究活動、または直接的に行政に働きかける活動に取り組んでいる。

④ 資金

Lighthouse の活動は全て行政の委託か、行政からの助成金を獲得している。もっとも大きい収入源となっているのは

委託金で、その次ぎは助成金、3番目は寄付金となっている。

(3) 特色ある活動

① 交流の場の提供

建物の1階は、だれもが自由に入出りできる。テラス付きのカフェとレストラン、理美容室、HIV抗体検査室、パーティーホール等がある。ホールは、近所の企業が会議に利用することもある。庭には噴水や草花が植えられ、奥にはかわいい託児所もある。

② 患者・感染者への支援

建物の2階は、患者・感染者のためのスペースとして1階とは区別されており、プライバシーが守られた空間となっている。

③ 職業訓練

約20台のパソコンを備えた部屋があり、資格取得に必要な訓練を受けることができる。患者自身が講師となっている。職業の紹介もしており、NGOのボランティアマネージャーや福祉事務所のパートタイム職員になることが多い。このような職場に患者・感染者がいることで、福祉を必要としている人にピアな立場で援助することができる。また、患者・感染者が収入を得ることは、国の生活保護の予算を減らすことにつながる。

④ ライフスキル・トレーニング

怒りや痛みなどの感情に自ら対処する方法を学んだり、代替療法を行ったり、英会話を教えたりする。瞑想のための部屋や、複数のセラピールームがあり、ホリスティック・メディスンやマッサージ、アロマセラピー、ハーブ療法、鍼、指圧など10種類以上にもわたるセラピーを無料で提供している。子ども連れの感染者のためには託児所もあり、安心してすごすことができる。

⑤ 資金調達活動

ライト・ハウスの年間予算は約200万ポンド(約3億6千万円)。そのうち45%が

国(保健局)や区から、残り55%が会の資金調達によるものである。オークション(約5000万円)、企業(例えばマスターカードから2000万円)や財団からの寄付、個人の遺産からの寄付、パーティー開催による収入などがある。

⑥ ボランティアの研修

ボランティアを志望する者に対して、2日間の研修を実施している。まず事務局長が、ライトハウスの使命や理念、沿革、活動内容について徹底的に伝える。次にスタッフである看護婦が、HIV/AIDSの医療的側面や患者・感染者のケアについて指導する。そして、AIDSボランティアをする上で欠かせないテーマである差別、セクシャリティ、プライバシーなど社会的側面についても研修する。

ボランティアの研修は、その内容・時間ともに、わが国においてもHIVと人権・情報センターが実施している研修とほぼ同等のものである。

(4) 教訓

LighthouseはTHTと合併したにもかかわらず、「とくに力を入れているところ」はTHTと多少異なる。Lighthouseは「女性」「血友病患者」「sex worker」に「力を入れている」と答えたが、THTはとくにこのグループを指定しなかった。THTは研究や衛生やアドバカシーを強調しているけれど、Lighthouseはもっと社会的な面を強調し、ケアを提供するという一方で、「力を入れているところ」の差はその訳かも知れない。合併はとくにそうだが、AIDS NGOはそれぞれ特色をもって、自分の専門に集中しながら、他のNGOの協力によって効率的にクライアントに優れたサービスを提供することは可能となる。

Lighthouseという団体の存在感はTHTとの合併によって、ある意味、薄くなってい

ると言えよう。しかし、THT と違う特色もっているから THT はそもそも合併を求めたはずである。この調査で明らかになったのは Lighthouse は独自の専門、独自の力のあるところを持ち続けていることである。

3) ランドマーク

(1) 沿革

Landmark は 1989 年、ロンドン市内の低所得層や黒人の多く居住するブリクストン地域に設立された。この地域の「ドロップインセンター（地域の人々が寄り道するところ、あるいは人生の途中で立ち寄って、しばしの時を過ごすための場所）」であり、年間利用者約 1000 人のうち 73% が地域の住民である。

設立当初はゲイの利用者が多かったが、アフリカ移民やヘテロセクシャルの男女の感染者が多くなるという時代の変化を受け入れて、活動を続けている。ゲイ・黒人・女性に向けた 3 種のリーフレットがあり、それぞれにデザインや言葉づかいを工夫している。

(2) 活動の現況

建物の 2 階には、区の出張所がおかれている。行政が NGO の施設の 1 室を間借りしているというもので、母子担当や成人担当のソーシャルワーカーがいる。利用者は区役所まで行くことなく、NGO で過ごす中で、行政の専門家の援助を受けることができる。行政が民間施設を利用して、住民へのサービスを提供するという、合理的で堅密な NGO との連携がある。

運営費の年間予算は約 100 万ポンド（約 1 億 8 千万円）で、主として東南ロンドンの保健局からの資金で運営されている。専従職員は 18 人で、それぞれの活動やボランティア調整などのコーディネーターである。

約 60 人のボランティアは、送迎の運転手やバディ、コンピューターを指導するなどの活動を行っている。

ゲイの感染者が多く、AIDS 差別・ゲイ差別と闘わなければならなかった時代から、アフリカからの移民やヘテロセクシャルの男女へと感染が拡がり、いろいろな立場や人種、文化的背景をもつ感染者が共生する時代へと移っていった。ランドマークは、このような変化を柔軟に受け入れていく姿勢を利用者から学んでいるといえる。また、区のソーシャルワーカーの部屋が施設内にあるなど、利用者主体の、合理的で機能的な、行政と NGO との連携がはかられている。

(3) 特色ある活動

主な活動内容は以下のとおりである。

①情報提供

各種の情報提供があり、他の施設や病院のサービスについても情報提供している。

②住居の斡旋

専用の電話相談を行っている。

③福祉制度に関するサービス

英国の福祉制度は複雑なため、専門のスタッフが助言する。区役所へ行きづらい利用者も気軽に相談することができる。専用の電話相談を行っている。

④対象者別の援助

曜日ごとにゲイや黒人や女性のための会合が開かれ、さまざまなテーマでディスカッションやワークショップが行われる。例えば、治療や生活上の問題について。

⑤カウンセリング

カウンセリングルームは、部屋ごとにデザインや基調となる色、家具のセンスが異なっている。クライアントに合わせて部屋を使い分けている。

⑥補助療法

鍼・アロマセラピー・漢方・ハーブ療法・

マッサージなどを行っており、シャワー室も完備している。

⑦通院介助サービス

病院・ランドマーク・自宅間の送迎を行う。家族の人数が多い人も利用できるようバンを所有している。

⑧その他のサービス

託児室や食堂、クワイエットルーム（静かな部屋・自分と向き合い感情表出ができる）があり安心してサービスを受けることができる。利用者がその持っている特性を生かして、サービスを提供する機会を作るような努力もしている。（音楽会の開催等）また、利用者同士が情報交換をして互いに助け合っているが、そのような場にスタッフが同席することで感染者にしか分からないような生活上の知恵を学んでいる。

(4) 教訓

利用者による評価は、何よりもこの機関（施設）の役割を示している。

ランドマークの存在については、「病院で告知を受けた後、気が動転していて友人に相談したら、ここを教えてくれた」とか、「告知を受けた時に、そのカウンセラーから医療やサービスの情報提供を受けた。告知の時に情報をもらえることはありがたいことだ」などの利用者の言葉が、NGOと医療現場との密接な連携の重要性を示している。

ゲイ、ヘテロセクシュアル、黒人女性などさまざまな立場の PWA/H から得られた《なぜランドマークを利用しているか》という問いにたいして以下のような回答が寄せられている。

○近くに住んでいて便利。住宅サービスを受けることができたし、生活上の有益な情報が得られる。

○感染してから長くなり、仕事もしていないし友人も遠くに離れていて孤独だった。

ここではいつもみんなが温かく迎えてくれる。温かい食事も食べられる。

○自分は白人でヘテロなので、多くのゲイ・女性・黒人のためのサービスが受けられない。ヘテロの行くところはなかなか見つからない。しかし、ここでは誰でも同じように受け入れてくれる。同じヘテロの感染者と会って、必要な情報と仲間が得られる。

○他のNGOでも同じサービスは受けられるけれど、住んでいるところから近く、気楽に来られるのがいい。女性講座も気に入っている。

○精神的なサポートがあり、ひとり一人に対するサービスが行き届いている。いろいろな人と出会って違う文化を知ったり、人との接し方を学んだりできる。補助療法のサービスも受けられる。

4) ポジティブ・プレイス

(1) 沿革と現状

1992年に地域の感染者のための施設として感染者自身によって設立された。1994年には国の宝くじの配分を受けて現在の施設に移り、1995年には配分金で託児所と庭を増築した。

Positive Placeの目的は、「HIV/AIDSの影響を受けている全ての人々のニーズに対応すること」となっている。PWAだけではなく、その家族、友人、また一般人でものサポート活動も行う。

現在は6人の有給専従職員という、比較的規模のNGOであるが、100人のアクティブ・メンバーを擁しており、さまざまな活動を行っている。

(2) 主な活動

① 教育／啓発

i) 学校やセミナーなどにスピーカーやファシ

リテータを派遣する。

ii) 独自のイベントやキャンペーンを主催する。

iii) アウトリーチ活動

iv) インフォメーション・サービスとして、さまざまな出版物やノベルティ・グッズを作成している。また、インターネットを通してネットワーク作りなどしている。

② PWA/H とそのパートナーや親類へのサービス

i) ドロップインセンター： 昼間と夜に行うピア・サポートの会場として使っている

ii) セラピー： 針、ストレス管理、アロマセラピー、指圧、マッサージ、霊気

iii) 相談： 定期的 PWA 専用電話相談、栄養管理相談、金融相談

iv) ケア・サポート： ピア・カウンセリング (人種/国/文化同士)、美容、ライフ・スキル・トレーニング、職業トレーニング

v) その他サービス： 言語通訳、保育

③ ボランティアに対するトレーニング

i) 一般初心者研修： HIV に対する意識を高める、自分の限界、自己主張 (6 時間)

ii) 受付/総務 (6 時間)

iii) メンター (ロールモデルになるための) 研修

④ 資金

Positive Place の収入の 60~79%は GO から入る。自治体から委託受けか事業はもとも大きい収入源となっており、ほとんどの行っている事業はなにかのかたちで自治体から委託金をもらう。その次は GO からの助成金になる (税金の免除もしてもらっている)。寄付はその次になる。

(3) 活動の特色

古くから使用されている建物を改造して、明るく開放的な部屋をつくり、屋根には植物を植え込むなど、工夫を凝らした設計が

建築賞を得るなど、評価も高い。

年間予算は 4000 万円で、国や地方自治体からの助成金がおもな財源である。常勤 3 人非常勤 2 人のスタッフ、40~50 人のボランティアで運営されている。年間の利用者は約 600 人である。主な活動内容は以下のとおりである。

① カウンセリング：

アクセスポイントへ出かけてゆき、感染者と出会い、様々なサービスを紹介する。生活費に関する相談や精神的援助、通訳、感染者同士の交流などのニーズがある。

② 住宅相談：

住宅サービスも行っているが、ランダムも良いサービスを提供しているので、専門家の派遣を依頼することもある。

③ グループワーク：

当初は誰もがいつでも立ち寄ることができる場所を提供していたが、現在は、対象者や目的を限定したサポートを心がけている。ゲイ・黒人・女性を対象にグループワークを行い、感染者自身がピアの立場で支援している。

④ 補助療法：

鍼・マッサージ・指圧・気功・アロマセラピーなどの補助療法を行っている。鍼のみ国からの援助があり、その他は独自の資金で提供している。7 人の専門スタッフがいます。

⑤ 各種講座の開催：

地域の中には大学が多く、生涯学習として多くの講座が一般に公開されている。その講座に参加する前の援助、つまり自分に自信を持つための講座を開催している。瞑想・アロマセラピー・セルフマッサージ・セルフエスティーム・太極拳など。講座には必ず食事のサービスがあり、その場で栄養についても触れられている。

⑥ 移送サービス：

地域の中での移動がしにくいため、感染者の多くはタクシーを利用したいと思っている。タクシー券を配布するとともに、タクシー運転手に対する研修を行い、HIV感染者に適切に対応できるよう訓練している。

⑦AIDS教育：

地域の学校へ出向いて行って、AIDS教育を行っている。

⑧実習機関：

社会福祉系大学生の実習受け入れ機関でもある。2大学から10ヶ月の実習に来ている。

⑨その他：

追悼の部屋（クワイエットルーム）にはろうそくが灯されている。1人で、あるいは友人が集まって亡くなった仲間を追悼している。ロンドンライトハウスでは祭壇をおかなくなっていたが、まだまだ厳しい状況の中で亡くなっていく人がいることを示している。

(3) 教訓

Positive Placeは比較的の小規模のNGOであり、ロンドンの周辺にPWAを対象としている他のNGOは少なくないようである。一つのグループをターゲット・クライアントにしているNGOもある（女性の感染者やゲイの感染者など）がPositive Placeは「全てのPWA」を対象にしている。特色があれば、助成金などはとれやすくなるという考え方は必ず適切ではないことをPositive Placeは証明している。しかし、他PWA対象のNGOと異なる点として、Positive Placeはアドバカシ的な活動よりも、ケア・サポートを中心に行っているようである。

Positive Placeは他NGOと競争しないように、協力的な関係を作ることに手をかけている。具体的にこの関係はどのように作るかを今後検討する必要がある。

PWAに対して、GOもNGOもさまざまなサービスを行っている。その中で、Positive Placeが一つのグループのみを対象にするのではなく、「全ての人々」に優れたサービスを提供している。さまざまなケアサポート・セラピーなどを提供するのに、主な資金はGOからもらっている。これはGOよりも優れたサービス（もしくは低コストで）提供できるから、GOは助成金を出したり、委託事業を任せたりしているだろう。はっきりした特色がなくても、NGOだからこそできるサービスはあるということをイギリスのGOが認めているという背景があるからである。

Positive PlaceはHIV/AIDSに影響を受けている全ての人を対象にしている。PWAへのサービスは一般人より多いけれど、とくに特色は強く出していない。特色がなくても運営資金の60～79%をGOからもらう。NGOだからこそあるサービスを提供することができることになる。GOはこのNGOの活動・サービスを評価し、資金を含めて、さまざまなサポート・支援を実施することができることを示している。

5) アフリカン・コミュニティ

(1) 背景と沿革

アフリカの文化には、亡くなった人の身体や魂は故郷へ帰って生き続けるという考えがあり、遺体をアフリカに送り返すことを大切に考えている。The African Community Involvement Associationは、亡くなった人の遺体をアフリカに送り返すためのサポートをすることから活動が始まった。

1992年にThe African Community Involvement Associationが設立された当時は家族や友人に告げることもできずに、偏見と孤独の中で亡くなる人が多かった。

アフリカン・コミュニティでは、亡くなった人の通夜に集まった人々をはじめ、多くの方々から寄付を募り、当初はその活動資金としていた。

お互いに助け合いながら家族や友人のつながりを強めていくことは、地域のネットワーク作りに大切なことで、感染者になっても孤独になることを少なくすることができる。アフリカン・コミュニティは黒人を対象としたAIDS-NGOとしてはもっとも大きな団体で、「裁かない」「共生」を理念として掲げている。

(2) 活動の現状

現在では、保健局が民間団体を支援するための予算を持っており、保健局から配分を受けている約 3000 万円が会の予算のほとんどを占めている。また、各区ごとの社会サービスについて事業委託を受けている。民間が行うサービスに出資することで、行政は、低コストでより充実した内容の事業を行うことができる。他に、国の宝くじから1千万円の寄付を得たり、慈善団体が集めた寄付金で、ボランティア団体の企画する事業を助成したりするシステムがある。

アフリカン・コミュニティには専従職員が6人とパート職員が9人おり、それぞれが約40人ずつのボランティアをコーディネートしている。いずれも、アフリカの文化に対する誇りを持ちながら、自立と共生を目指す姿勢を堅持しつつ地域のネットワークやコミュニティを重視したきめ細かなサービスを提供し、何よりも、NGOの果たす役割を明確に自覚しながら活動を展開している。

(3) 特色ある活動

主な活動内容は以下のとおりである。

① ドロップ・イン・センター

誰もが立ち寄ることのできる場として、

感染の有無に関わらず、地域の中で個人個人のネットワーク作りをするための場を提供する。託児所や、一人で考え事をしたり感情のままに叫んだり泣いたりすることのできるクワイエットルームもある。

② ワークショップ開催

一般向けにはアフリカ文化のワークショップを、感染者向けには、栄養や育児・母子感染予防・治療について等のグループワークを開催している。

③ ランチサービス

感染者に限定せず地域の人々を対象に、安い料金で栄養バランスの良い昼食を提供している。収入のない人へは無料で提供し、体調の悪い人へは自宅への配食も行っている。

④ バディ

感染者、患者にたいして、特定のボランティアが定期、あるいは不定期に主に生活の場における話の聞き役としての精神的援助を行う。

⑤ カウンセリング

共通の文化的基盤や生活習慣を持つ、アフリカ人同士の「文化的カウンセリング」を重視している。他のコミュニティでは理解されにくい習慣や考え方に寄り添うことができ、共感することができるからである。

⑥ 専門家のサポート

医師・歯科医師・法律家・出入国管理の専門家などがサポートに入るネットワーク体制を持っている。

⑦ ボランティアの育成

ボランティアのほとんどがアフリカ人であり、HIV感染者でもある。ボランティアの募集は、地域でワークショップを開くときに呼びかけて行う。ボランティアの研修を受ける中で自尊感情を高め、自分自身を勇気付ける方法も考えることができる。自分に自信を持って自己実現を目指しながら、自分自身の情報管理を含めたプライバシー

感覚を養うことができる。ボランティアとして組織の中で働いていたという実績は、公的機関へ就職する際に有利な証明となる。公的サービスをより良いものにしていくためにも、ボランティアを育成して社会に送り出すことも大切な活動である。

⑧地域のネットワーク作り

各区にある病院や公的機関の中に、ボランティア団体のための事務所を設置し、告知後のカウンセリングやサポートの紹介などを行っている。感染告知の時にこそ、より効率的にそして全人的に必要なサービスを提供する必要があり、病院の中に様々な団体が入って関わっていくことが大切である。性保健科専門外来には、必ずアクセスポイントがある。HIVに関わらず、地域に根ざした団体との連携を図るためにも重要な場所である。

6) ブラックライナーズ

(1) 沿革と理念

Blackliners は 1989 年に、大規模な HIV/AIDS 関連団体のボランティア達 (ジャーナリストの Arnold Gordon も含む) が、黒人とマイノリティ民族コミュニティのニーズが文化的に適切な方法で満たされていないことを憂慮し、その当時「Blackliners ヘルプライン」として知られていた活動を始めた。その後、Blackliners は中規模な HIV/AIDS チャリティーに成長し、400 人以上の PWA/H とともに働き、19 人の有給専従職員と 2 人の有給パート職員、そして 100 人以上のアクティブな会員を擁するようになった。黒人と他のマイノリティ民族コミュニティを対象として黒人により運営されている。

Blackliners の活動理念は、「HIV/AIDS に感染したりその影響を受けた英国のアフリカ系・アジア系・カリブ系コミュニテ

ィの会員の福利を向上すること、これらのコミュニティでのより良い Sexual Health を実現し一般的な保健についても向上を促す。英国の一般の人々、医療関係者、国・地方行政関係者、特に英国に住んでいるアフリカ系・アジア系・カリブ系コミュニティの人々に対して、HIV/AIDS、Sexual Health、英国の黒人とマイノリティ民族コミュニティにおける保健に関する事柄について、教育、情報、アドバイスを与える。」と示されている。

(2) 主な活動内容

Blackliners の主な活動は以下のとおりである

①教育／啓発

・母子感染予防：

1999 年 1 月の調査では、HIV に感染した乳幼児を持つ英国の母親のうち 60.3%が、子供に AIDS が発症するまで自分の HIV 感染を知らなかった。Blackliners は、妊婦に HIV 検査を奨める大規模なキャンペーンを 1999 年に行った。キャンペーンポスターには、スパイス・ガールズの人気アイドル、メラニー B が裸で妊娠に扮して登場している。

・若い黒人層対象の保健アドバイスと感染防御：

若い黒人層には、1980 年代と 90 年代初めの HIV/AIDS 教育が十分にはとどいていない。成長するとともに直面するリスクについてはほとんど知らなかったと言ってよい。Blackliners はそんな若い黒人層を対象に、多大な努力を重ねてきた。ピアエデュケーションにも重点が置かれ、10 人の若者を集め性保健ピアエデュケーターとしてトレーニングを行った。

・「ニュースライン」発行：

年 4 回発行で、Blackliners からの報告、他の NGO への問い合わせ情報、製薬会社

や新聞からのニュースなどを掲載している。

②PWA/H とそのパートナーや親類へのサービス

・ドロップインセンター：

オープン以来 10 年が経過したセンターで、Riverhouse と共同で運営されている。新規診断のための特別プログラムがあり、すべてのサービスとカウンセリングはドロップインセンターで行われる。

・セラピー：

ストレス管理、アロマセラピー、マッサージ

・その他：

ハウジングサービスと在宅ケアサービス、ピアエデュケーションプロジェクト、トリートメント交換ワークショップ、フォーラムなど。

③救援、支援活動

・難民申請者支援プロジェクト：

Blackliners のクライアントの多くは難民申請をしている人々で、このような人々を支援するために「dispersal policy」(待っている難民申を一ヶ所ではなく、英国の中でいろいろな場所／街にばらばらに送るという方針) や不十分なサービス利用の権利に対してロビー活動を行っている。また、福利厚生を受けることができない人々に対して、食物や衣服を配給するプロジェクトを行っている。

・ゲイ対象のカウンセリングプロジェクト：

このプロジェクトは、下院議員の Stephen Twigg により 1999 年 11 月に始められたもので、ロンドンでは唯一の黒人を対象としたゲイカウンセリングのプロジェクトである。黒人と民族コミュニティは、文化的に微妙なカウンセリングが特別に必要とされており、このプロジェクトは重要なサービスを提供している。

・翻訳／通訳サービス：

陽性の人々やテストを受けている人々へ

のサービス。

④資金確保

Blackliners の 2000 年度の収入は 738,146 ポンド (約 1 億 3070 万円) で、そのうち 82% が行政機関からの助成金である。Blackliners はメンバーからは料金を徴収しておらず、会費としての収入はない。寄付と贈与が合計で 54,334 ポンド (約 960 万円) で収入の 7.4% を占め、トレーニングセミナー料等が合計で 58,936 ポンド (約 1040 万円) で収入の 8% となっている。

Blackliners のほとんどの収入が政府機関からの委託事業等からきているが、収入の多様化と企業からのサポートの増加を Blackliners は方針として掲げている。また、オークションやバザーなどの資金集めの活動もしており、スパイスガールズのメラニーB の支援で大規模な資金集めパーティーを開いた。このパーティーは、メラニーB がホストとして彼女の家で行われ、多数の有名人を含む 350 人以上の人々が集まった。このパーティーでは、企業 (航空券など) や有名人 (ブライアン・アダムスサイン入りギター) から寄付されたものをオークションにかけて資金を調達した。

行政機関以外の Blackliners のスポンサーは以下の通りであった。：

The Body Shop Foundation, Levi Strauss, Seventh Day Adventist Church, Bristol-Myers Squibb Ltd, Dupont Pharmaceuticals Ltd (他に 4 つの製薬会社)

(3) 教訓

Blackliners はイギリスの大規模なエイズ NGO (Terrence Higgins, Lighthouse 等) ほど大きくはないが、黒人と少数民族グループを対象に活動しているグループの中では大きい部類に入る。Blackliners はとても強い identity と使命を持っており、クラ

イアントのニーズに対してははっきりとした見方を持っている。それが、行政機関から助成を受けられ、またスパイスガールズのメラニーB など有名人からも注目され、資金調達や宣伝で支援を取り付けられる理由である。

Blackliners は、他の NGO ともよい関係を保っている。さまざまな委員会や統合団体に参加することは、HIV/AIDS とアフリカ系・マイノリティ両方の問題について定期的に他の団体と情報交換する上で良い方法である。Blackliners は、それぞれのサービスで他の NGO とパートナーシップを結んでいる。たとえば、HIV/AIDS 関連の不可欠なサービスをマイノリティ民族向けに行うリビングセンターは、Riverhouse との協力で運営されており、地域の保健機関からも支援を受けている。

強力で効果的で効率的な NGO 間でのパートナーシップや、NGO と GO との間の強いパートナーシップを構築することは、日本にとってきわめて重要な点と言えるだろう。Blackliners の様な NGO を調査した結果、いくつかの貴重なヒントを見つけることができた。第一のポイントは、NGO の目的と identity をはっきりさせることにある。Mission Statement (活動理念) を明確に示すことにより、他の機関・団体とのパートナーシップの構築が可能となる。

英国において Blackliners は、マイノリティ民族グループのための AIDS-NGO の中でもすぐれた NGO のひとつとして、その地位を確立することに成功し、行政機関、後援者、企業から支援と資金を取り付けている。その成功への道は、コミュニティでの団体の使命と役割をはっきりと分かりやすくすると同時に、HIV/AIDS 関係の NGO と GO (公的機関) のネットワークにも参加することである。

7) ウガンダ AIDS アクションファンド

(1) 背景と活動理念

Uganda AIDS Action Fund (UAAF) は、ウガンダの HIV/AIDS の状況を憂慮するイギリス在住のウガンダ人グループによって 1987 年に設立された。UAAF は様々なプログラムや活動をアフリカで行っているが、現在の活動の中心はイギリス在住のアフリカ人への HIV/AIDS の影響についてである。現在 UAAF は、9 人の有給職員と 60 人のアクティブな会員を擁している。

UAAF の Mission Statement は、「UAAF は、質の良い保健促進サービスを HIV/AIDS に関しての情報提供、予防のためのアドバイス、支援と提言活動を通して提供する。」となっている。

(2) 主な活動

①教育/啓発

- i) ポスター、ビデオ、チラシ等様々な教育・啓発用ツールの作成。
- ii) 病院やクリニックのスタッフ、政府指定のサービス提供者向けのトレーニングセミナーやプログラムの実施。内容は、アフリカ人のサービス利用に影響するであろう文化的な留意点について。
- iii) 青年層を中心に行うプログラム (しばしば父母の参加も伴う) 等の健康促進活動は、コミュニティーを基本として行われる。ピアエデュケーションプログラムも運営されている。その結果、一部の健康促進活動がイギリス国内のザンビア人とケニヤ人に対する活動として、コミュニティーでも、同様のピアエデュケーションが始まった。
- iv) HIV/AIDS に対する不安に対して情報提供や、電話を使った定期的なカウンセリングを行っている。また、他に 3 台の電話を使ってキャンペーンも行っている。
- v) リビングセンター: UAAF は、11 のア

フリカ団体が所属する連合体と共に、南ロンドンのアフリカ人コミュニティを対象に、ヘルシーリビングセンタープロジェクトを進めている。

②PWA/H とそのパートナーや家族へのサービス

i) 電話カウンセリング：ホットラインは午前10時から午後10時まで開かれ、通常1週間で3~4件の電話がある。また、ピアカウンセリングも行われている。

ii) トレーニングプログラム：職業訓練(コンピュータ)と日常生活を送って行くためのスキルのトレーニングを行っている。

iii) その他のカウンセリングサービス：法律面の支援、ハウジングアドバイス、福利厚生申請手続きの支援。

iv) 紹介サービス：UAAF が提供できないサービス(例えば、移動手段確保やセラピー等)について、他のNGOを紹介する。

③サポートとアドボカシー

UAAF は様々なアフリカ関係 (Health First African, Brent and Harrow African Workers, 等) と HIV/AIDS 関係 (Pan London HIV/AIDS Providers Consortium、UK NGO AIDS Consortium、保健省の HIV 垂直感染の減少を目指す専門家グループ) の NGO や政府関連機関に属している。UAAF は、このような関わりを持つことにより直接的に政府方針へのインプットができ、また他のグループと協力することにより、政府へ外から働きかける影響力を効果的に増やすことができる。

④調査報告

UAAF は様々な会議において、自身の活動を色々な点から発表している。しばしば UAAF は、他の NGO と混成の調査チームの一員として参加する。今までに発表された報告は以下の通り：

「ボランティアセクター：供給者側からの見通し」

「イギリスにおける HIV に感染している難民申請者のニーズについて」

「コミュニティで若者に対する性教育を進めていくためのパートナーシップとは」

⑤資金

UAAF の 1999 年度の収入は計 305,448 ポンド(約5400万円)。そのうち90%以上が、行政機関からの助成金や贈与により占められている。寄付の占める割合は一番少なく、会費も 1999 年度は 100 ポンド(約1万7千円)に過ぎなかった。

(3) 活動の特色

UAAF はどちらかと言えばロンドンでは小規模な NGO の部類に入る。しかし、その規模にもかかわらず行政機関から資金を得ており、UAAF が対象とするマイノリティグループにとって重要な活動を色々行っている。これは、UAAF が自身の identity、役割、専門性をしっかりと見据え、これらの事柄をクライアントグループだけでなく、資金援助を受けている政府に対しても効果的に伝え、UAAF はプロジェクトを任せるに適任であるという事を伝えることができた結果である。例えば、UAAF がイギリス国内のザンビア人とケニヤ人コミュニティに対して行っている保健促進プログラムは、地方政府の保健機関から委任されて行われている。これは、UAAF がこれらのコミュニティに対して専門的な知識と経験を備えていると政府が認めている証拠である。

UAAF という団体とその目的は、行政機関から理解され、また高く評価されており、行政機関との関係は緊密である。同じように他の NGO との関係も良好と言える。様々な委員会や統合団体に参加することにより、UAAF は他の NGO の活動を知ることができ、そうすることにより、UAAF が同じようなサービス始めて他の NGO と競い合ってしまうのではなく、UAAF はサービスを提供できる

他の NGO にクライアントを紹介するだけで済む。

この大規模な NGO のネットワークは、様々な種類のそれぞれ独自の identity を持った NGO や、中央と地方の政府から構成されている。従って UAAF は、他のグループと協力し、クライアントに提供するサービスの効果を最大限にし、資源を効率的に活用することができる。

(4) 教訓

UAAF の他団体（・政府機関・他のエイズ NGO）との協力関係を、特に UAAF がどのようにして資金を調達し活動やプロジェクトに使っているのかという点から調べた。UAAF の活動は日本がイギリスの AIDS NGO から次のような見習うべきところをいくつか示している。

UAAF は比較的小規模な NGO ではあるが、はっきりした目的と特色をもって、自身の使命と専門性に集中し、他の NGO（UAAF が行っていないサービスを提供する NGO）との協力的なネットワークに参加することにより、効果的なサービスをクライアント（ターゲット・コミュニティ：イギリスのアフリカ人コミュニティ）に提供している。

また、行政機関もこのネットワークに含まれている。行政機関は、それぞれの NGO の利点をよく認識し、UAAF を含む各々の NGO を支援しながら自身の業務を行っている。

さらに、その目的と特色を他の AIDS NGO と GO に効果的に伝えることによって、活動を行うための資金を GO から獲得している。

(8) マイルドメイホスピス

(1) 沿革と理念

1866 年、貧しい東部地区のまんなかに、ミッションホスピスとして設立された。

1982 年、今の場所にロンドン病院の分院として移り、1985 年にはホスピスとして再生した。1988 年、ヨーロッパで初めての AIDS ホスピスとなった。

当初は亡くなる人を看取るターミナルケアであったが、現在では緩和ケア中心になった。現在、成人 23 人・子ども 12 人・AIDS 脳症患者 9 人が入所している。末期の人もいれば短期入所の人もいる。また、家族ごと来所して休息できるショートステイ（短期入所）施設でもある。運営資金は寄付による。

(2) 活動の内容

主な事業内容は以下の通りである。

①緩和ケア

各専門職がチームとなり、緩和ケアを行っている。患者として、どのようにしたら生きていきやすいのか、幸せになるのかを考えながらサポートしている。あらゆる職種の人たちが週 2 回のケーススタディを行うなどにより、チームケアがうまく機能している。

②デイケア

週に 3 日、社会サービスの受け方について・コンピューター等の職業訓練・補助療法などを行っている。脳症専門デイケアでは、週 2 日のサービスを行っている。

③母子病棟

12 人が入所しており、家族で 1 部屋持っている。昼間は保育所で子どもをあずかっている。母親の病名を知っている子も知らない子もいるので、配慮しながら対応している。また、子ども同士の会話にも気をつけている。子どもが感染している場合は、子ども自身が「AIDS って何？」と聞いてきて、受けとめられるようになったときに感染を伝えるようにしている。年間約 600 人が利用している。3 剤併用や帝王切開によって、母子感染を 1% にまで下げることが

できるようになった。

(3) 事業にかかわる専門職

① カウンセラー：

3人のカウンセラーのうち、1人は子ども専門である。本人への告知や、家族・友人・仲間が亡くなった時の死の受容を援助する。また、AIDS 孤児へのカウンセリングも行っている。

② 栄養士：

2人の栄養士が勤務しており、服薬指導や副作用への対処を行う。また、飲酒・ドラッグ・貧困などの問題を持つ患者の栄養について援助する。多様な文化的背景を持つ患者が多いため、宗教などに配慮している。

③ 看護師

精神科・小児科などに、約20人の看護師が従事している。

④ 医師：

4人の医師が勤務しており、患者が緩和ケアを受け入れるための精神的療法も行っている。

⑤ 作業療法士：

3人の作業療法士のうち1人はデイケアを担当し、家庭訪問をして在宅療養のための指導を行う。

⑥ 臨床運動療法士：

臨床運動療法士は1名で、体重減少した患者に筋肉が復活するような運動療法を、肥満の場合は減量のための運動療法を行う。

⑦ ソーシャルワーカー：

2人のソーシャルワーカーが勤務し、社会サービスの利用について助言する。

⑧ チャプレン

心理的支援を行う宗教者として、1人のチャプレンが勤務しており、患者のそばに常に寄り添っている。1985年にキリスト教のホスピスとして設立されたが、AIDS 専門ホスピスとなってからは、あらゆる宗派の

宗教者とネットワークを作っている。宗教者はカウンセラーと常に連絡を取り合っている。10年前は90%がゲイであったが、現在ゲイは10%で、ヘテロセクシャルやアフリカ圏、アルコール依存の人が入所している。

⑨ ボランティア：

がん患者のためのホスピスには400～500人のボランティアが集まるが、当ホスピスは約100名のボランティアが関わっている。文化的背景や心理面に理解を持って、ボランティアとして関わる人は少ない。庭の手入れ、デイケア、入院患者のバディ、通院介助、鍼やマッサージなどを行い効果を上げている。

4. 英国と日本の NGO の財政的基盤

日本 AIDS-NGO 75 団体と、ロンドンの AIDS-NGO 8 団体について、それらの財政に占める行政との連携による得られる費用割合について比較を行った。

日本の AIDS-NGO では、第1部の報告にも示されているとおり、「0%」あるいは「1～20%未満」の回答が過半数であった。その内訳は、0%が16団体、1-19%が35団体、20-39%が8団体であり、40%未満の団体が79%を占める。

これに対してロンドンの NGO では、行政との連携による得られる費用が40%未満の団体は皆無であり、行政負担割合が40-59%である団体が25%、60-79%が13%（1団体）で、80%以上が63%を占めていた。（図1）

日本の NGO における行政との連携・協力の形態では講演会が最も多く、研修・広報誌などがこれに次いでおり、事業委託が42%、助成金が40%、補助金が19%であった。しかし、ロンドンの NGO については、そのほとんどが事業委託費であり、年度ごとに事業